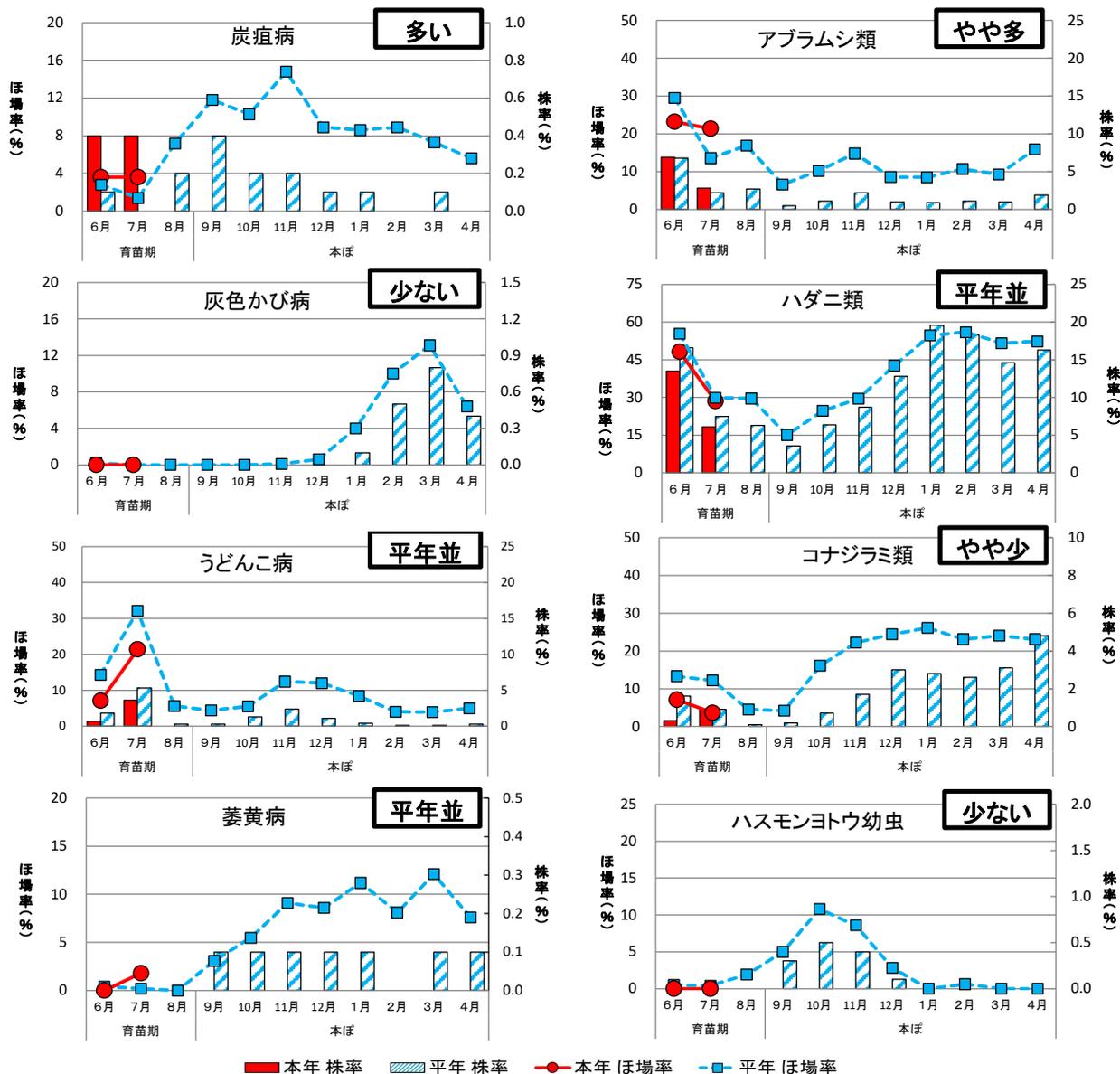


いちご病害虫情報第2号（7月）

令和6（2024）年7月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：56か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

一 育苗期のハダニ類防除 一

ハダニ類は平年並の発生量となっています。本ほでの発生量を抑えるためには、育苗期における防除を徹底し、本ほにハダニ類を持ち込まないことが重要です。

- 1 育苗期の薬剤散布には、天敵や使用時期を考慮してトクチオン乳剤（RACコード I:1B、収穫75日前まで）やアグリメック（I:6、親株育成期、育苗期）等を使用しましょう。また、モベントフロアブル（I:23）を育苗期後半～定植当日に灌注しましょう。
- 2 定植後に天敵導入する際は、天敵に影響の少ない薬剤を計画的に散布しましょう。
- 3 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 4 定植前に高濃度炭酸ガス処理を適切に行い、本ほへのハダニ類の持ち込みを抑えましょう。

■ 今月のトピックス イチゴ炭疽病

被害について

イチゴ炭疽病は高温期であるいちごの育苗期間中に発生し、育苗期の後半になるにしたがって発生が多くなる難防除病害です。

病徴は、葉では薄墨色の斑点型病斑が発生します（写真1）。葉柄やランナーでは、黒色の陥没した病斑を生じ（写真2）、多湿時には病斑上に鮭肉色の分生子塊を形成します。

クラウンに感染した場合には、株が萎凋して枯死（写真3）し、クラウン外部から内部に向かって褐変腐敗が進みます（写真4）。

主な伝染方法は、**水滴伝染**です。降雨や頭上かん水による水はねで感染株から分生子が飛散することで感染が広がります。

防除対策について

- 1 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りのない方法でのかん水を行う。
- 2 発病が確認された株は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 3 発病株の周辺の株は定植苗として使用しない（潜在感染のおそれ）。
- 4 症状が出てからの防除は困難であるため、予防を主体とした薬剤散布を行う。
- 5 定植前に本ほの土壌消毒を行う。



写真1 葉上の斑点型病斑



写真2 葉柄の陥没病斑



写真3 苗の萎凋症状



写真4 クラウン内部の褐変